

「地道な取り組みと 誠実な姿勢が成果を生み出す」

ミャンマーの少数民族が住む地域で、古くから栽培されている麻薬原料のケシに替わる作物としてソバを普及するという困難な任務に、8年間にわたり携わった吉田実さん。「多少の苦労もやりがいのうち」と、国際協力の現場での仕事に大きな喜びを感じている。



photo by Asada Yuki

「ソバ」を通じた 国際協力が仕事に

自身の純粋な関心を追い求めた結果、天職とも思える国際協力の仕事に出会った吉田実さん。「周囲に支えられ、学ばせてもらいながらやってきました」と謙虚だが、任務に、人に、真剣に向き合ってきたこれまでの成果が、ミャンマーの山奥で花開

うとしている。

食料危機が叫ばれていた1980年代、「食料生産に携わり、何か希望のある面白そうなことをやってみよう」と農業に興味を抱いた吉田さんは、大学で農学を専攻し、ソバ研究の第一人者、氏原暉男・信州大学名誉教授に師事する。当時、「若者はほとんど外に出るべき」という信念で学生や地域の若者の青年海外協力隊への参加を支援し、自

身もアジア諸国を舞台にソバ研究を行っていた氏原教授。そんな師の影響を大きく受け、吉田さんは農業大学校を経た後、念願の協力隊に参加した。

89年に食用作物隊員としてネパールに赴任した吉田さんは、ヒマラヤのふもと、標高2600メートルにある、ソバ・大麦などの雑穀の育種試験場を拠点に、農村地域の栽培現状調査、栽培試験などに従事。山岳地帯

の農業の奥深さに触れるとともに、現地の人々との交流などを通じ、農業技術による国際貢献に強い関心を抱いた。また現地で経験した農村調査の手法は、後に、専門を超えて総合的な地域開発支援にかかわった際も、大いに役立つこととなった。

帰国後は大学院に進学してソバ研究を続けたが、31歳のときに「博士論文の完成もままならないまま（笑）」、再度協力隊でネパールへ。このときは、協力隊チーム派遣「ネパール緑の推進協力プロジェクト」のチームリーダーとして、3年近く森林保全と住民参加型の村落開発に携わった。植林、インフラ整備、収入向上活動など幅広い支援を経験し、農業だけでなく、多分野にまたがる開発支援に興味を持つきっかけとなったという。

そしてミャンマーとの運命の出会いが99年。当時スタートしたばかりの、ソバ栽培普及の技術協力を携わっていた恩師・氏原教授からの「吉田、ミャンマーに来い」という一声に導かれた。以後2007年まで8年間、ソバ専門家としてミャンマーで活動することになる。吉田さんが活動の拠点として



コーカン特別区でソバ栽培の技術を指導する吉田さん(右)。ソバを普及させるという熱意が伝わり、共に汗を流す現地の人も少しずつ増えていった(写真提供: 平田慈花)



Yoshida Minoru

元JICA専門家

吉田 実

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.28

いた北シャン州コーカン特別区は、中国との国境に位置し、コーカン族を含む複数の少数民族が居住する山岳地帯だ。150年以上にわたり、アヘンの原料となるケシの栽培で人々は生計を立ててきた。ミャンマー独立以来、中央政府と長く紛争状態にあったこの地域は、ほかの反政府少数民族グループに先駆けて89年に政府と和平協定を結び、限定的な自治権を与えられると引き換えに、03年までにケシ栽培を撲滅することを約束した²。

「現地の人々を宙ぶらりんにしてはいけない」

吉田さんの任務は、ケシ撲滅のため、ケシの代替作物としてソバの栽培を普及すること。だが、赴任当初の状況は非常に難しいものだった。ソバは山間部の厳しい気候条件に耐えられ、手間も少なく済む代替作物ではあるが、ケシと比較すると収益性ははるかに劣るため、農民の反発は強かった。「なぜ私たちの収入源であるケシを撲滅する必要があるのか?」「ケシと同じくらいの利益がなければ、ソバ



かつてケシの栽培が盛んに行われていた九頭山(背後)のふもとに村の畑に、今は白く小さなソバの花が咲き誇る

栽培をやる理由はない」という声も聞かれた。普及の道筋が見えず、敗北感すら感じたこともあったが、「麻薬生産を止めなければ外部からの支援を失い、いつか取り残されてしまう」と危機感を持っていたコーカン特別区代表者らのソバ栽培への期待もあり、アクセスの困難な農村を足を棒にして訪問し、地道にソバの栽培方法を教えて回った。「あのころは本当に苦しかった」と当時を振り返る。

活動が続けることができた一番の原動力は、プロジェクトの結果、少しずつソバ栽培を取り入れる農民が増え、「たとえ収益が減ってもソバを作りたい。そのための支援をやめないでほしい」という彼らの声が吉田さんを強く後押しした。さらに02年、コーカン特別区自らも法的な統制を強化し、ケシ撲滅が十分に達成されたことで転機が訪れた。ケシが栽培できなくなり、ソバの存在意義が農民たちの間で認識されるようになったのだ。そのころ行われた国連薬物犯罪事務所(UNODC)の調査でも、吉田さんら

先駆者であった氏原教授から繰り返し聞かされた「現地の人々を宙ぶらりんにしてはならない」との思いだ。当時、この地域を支援していたのはJICAだけだったこともあり、受け入れられないから撤退する、というわけにはいかなかった。「本当に必要とされているのならば、必ず普及できる」と信じ、根気よく伝え続けました。その結果、少しずつソバ栽培を取り入れる農民が増え、「たとえ収益が減ってもソバを作りたい。そのための支援をやめないでほしい」という彼らの声が吉田さんを強く後押しした。さらに02年、コーカン特別区自らも法的な統制を強化し、ケシ撲滅が十分に達成されたことで転機が訪れた。ケシが栽培できなくなり、ソバの存在意義が農民たちの間で認識されるようになったのだ。そのころ行われた国連薬物犯罪事務所(UNODC)の調査でも、吉田さんら

1 少数民族の間では、国内で80%以上を占めるビルマ族に対し、過去の民族間の争いからくる共通の反ビルマ感情が残っており、反政府活動につながっている。政府は全民族をミャンマー国民として統一し多民族国家ミャンマーを形成したい考えだが、対立は今も残る。
2 ミャンマー政府は、反政府勢力や犯罪組織の資金源となり、また中国や東南アジアに流出して国際問題となっている、アヘンなどの麻薬問題の撲滅を目指している。
3 貧困削減のための緊急支援に加え、地域の農業・生活改善・保健・教育分野などを包括的・中長期的に支援。2010年まで実施予定。

Yoshida Minoru

よしだ・みのる 元JICA専門家。1965年福岡県出身。信州大学農学部卒業。八ヶ岳農業実践大学校研究科を経て、89-92年青年海外協力隊(ネパール・食用作物)に参加。帰国後、信州大学大学院(修士)、岐阜大学連合大学院(博士)でソバの研究を続け、96-99年、青年海外協力隊・ネパール緑の推進協力プロジェクトのチームリーダーに。99-2004年、ミャンマー・コーカン特別区におけるJICAのソバ栽培普及事業に、ソバ栽培専門家として赴任。05-07年、「コーカン特別区麻薬対策・貧困削減プロジェクト」に営農専門家として参加。(株)TACインターナショナル所属。



吉田さんが活動拠点としていたコーカン特別区山間部の農村風景。人々はコーカン語や、共通言語である中国語を話す。急いゆんな地形のためアクセスが難しい地域も多いが、JICAの協力で道路が整備されて支援が届きやすくなり、ケシ撲滅後の貧困も緩和されつつある

度の時間軸の中で見ていく必要があります。コーカン特別区では、山間へき地などの不利な環境に住む脆弱な人々が、ケシ撲滅後にますます厳しい生活状況に追い込まれていきました。そうした届きにくい人々の声を拾い上げる、長期的で計画性のある支援が要求されます³。

仲間とともに成果を生み出す喜び

「現場が好きでたまらない」と言い、生まれついで国際協力の専門家という印象を与える吉田さん。「一番の醍醐味は?」と問うと、「チームワーク」を挙げた。「一つの目的に向かい、現地の関係者や協力者とけんけんこうこうと議論して信頼関係を構築しながら、ベストと思われる方法を探し出し、実践に移していく。その結果うまくいけば、地域の人々から本当に感謝される。実にやりがいを感じます。

こうした経験ができるのはありがたいことだと思います。自らの仕事に対する喜びや誇り、感謝の思いが伝わってくる。03年、吉田さんはシャン族出身の女性と恋に落ち、結婚することになった。しかしこの国では、一般的に外国人男性がミャンマーの女性と一緒にいるのは認められにくい。否定的な反応も覚悟しつつ、プロジェクト関係者である政府機関の局長に恐る恐る報告すると、予想に反し局長は大変喜び、「君たちがミャンマーと日本の友好の懸け橋となることを期待している」と祝福してくれた。「この国のためにまずまず頑張らねばと奮起させた」とその時の気持ちをうれしそうに振り返る。それは、技術や知識だけでなく、「現地の人々や問題に誠心誠意向き合うこと」を信条とする吉田さんの姿勢と人間性が、彼らに受け入れられたからにはほかならない。



ネパールの農村で栽培現状調査や栽培試験に携わった青年海外協力隊時代(中央)「大学を卒業したばかりでまだ何も分からなかったが、ここで多くの経験を積むことができ、国際協力を続けていくきっかけとなった」

がひっそりと再開される可能性もあるのが実情だ。吉田さんはコーカン特別区に8年間かかわった経験から、一つの地域を長

い目で見据えることの重要性を強調する。「開発現場は、1年や2年だけを切り取って成果を判断できるものではなく、ある程

常に誠心誠意、現地の人々や問題に向き合うことが大切